



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.125

2014. 2. 1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

35

## 「木曾西高校地歴部の活動と卒業生」

**36年** 開田高原柳又遺跡に多くの仲間が参加しており、私も参加し各地からの、地元の仲間と親しくなり、木曾西校地歴部も先輩の青沼博之君がいて繋がりが強くなる。日義中学校郷土班卒業生が何人も地歴部に入部し私の遺跡調査を手伝ってくれるようにもなった。

**終戦後** 多くの高校に文科系のクラブ活動が盛んになり地歴部・郷土班等の考古系のクラブも多かった。24年12月1日中南信学生考古学会設立準備会が塩尻市桔梗ヶ原高校であった。諏訪清陵高校戸沢充則・松本県ヶ丘高校桐原健・桔梗ヶ原高校太田さん・木曾西高校安藤茂良・飯田高校今村賢司・松島透が参加した。木曾西校には藤沢宗平先生が21～25年勤務して地歴部を創設して郡内の調査一南木曾町太田垣外遺跡・神坂村青野原遺跡・日義村芝垣外遺跡・木相村深沢遺跡などを調査していた。その伝統が引き継がれ山口村山ノ神古墳の調査をし、32～35年に木曾東高校に樋口昇一先生が勤務し考古学の指導を受けるようになり、更に木曾教育会郷土館委員の先生とも調査を共にして郡内の遺跡調査をしている。読書村戸場遺跡・吾妻村細之山遺跡・開田村管沢遺跡・柳又遺跡・上松町最中遺跡がそうである。私が日義小中学校に36年に転任してきてからは私が指導しての調査が始まった。日義村お玉の森遺跡・巴松遺跡・稲荷沢遺跡・砂ヶ瀬洞窟等がそれであり、木曾教育会郷土館委員主体の開田村小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡にも部員が大勢参加している。中央西線福島一原野間複線化工事に伴う発掘調査では松本県が丘高校風土研究会と共同調査をしている。

お玉の森遺跡では校庭の平安時代1号住居址を担当してもらった。鍛冶遺構が住居内にあった特別な住居址であったが、私が出張で留守をして

いる間に調査したため帰ってきて現地に行ったら鍛冶遺構が壊されていて残念だった。まかせっきりにした私が悪かった。巴松遺跡はゴルフ場の土取りで丘が崩されて切り取りに竪穴住居の掘り込みが2箇所確認された。調査したら木曾では珍しい弥生後期のもので、甕片を埋めた炉や完形の甕が三個並んで出土したので私も生徒も興奮した。砂ヶ瀬洞窟は砂ヶ瀬川上流の石灰岩地帯にあって、古代人の生活痕跡を見つけようと期待したが、あまり大きくない洞窟でテラスもなく痕跡は確認できなかった。稲荷沢遺跡は国道管理維持事務所の建設で事前調査を要求するが拒否され、生徒の勉強になるならと2日間の調査が許されて慌ただしく調査をする。縄文早期押型文土器立野式土器の資料が多く焼石炉も検出するが実測図も取れずに終わったのが残念だった。大変だったのは西又Ⅱ遺跡の調査でした。木曾の仲間でも有舌尖頭器を掘ってということで木曾教育会郷土館委員が中心になって地歴部もみんなが参加した。夜懇親慰労会で少しはよかろうと高校生にも酒を飲ませた。その後先輩の青沼君が高校生相手に相撲をとった。暫らくして高校生が吐いたり・下痢の騒ぎとなった。悪酔いさせたとと思ったら青沼君以外の全員が同じ症状になった。昼休みに遺跡近くの山で採った茸汁にあたったので、一人飲まなかった青沼君だけが元気だった。翌日私は県教育委員会指導主事でしたので責任者としてテレビや新聞に報道されて大騒ぎとなった。

**活躍した生徒たち** 安藤茂良(信大 近世史)・楯英雄(国大 民俗)・青沼博之(愛知大 県埋文)・松山芳久(花園大 興禅寺)・清水祐三(信大 民俗 近代)・山下泰男(東海大 県埋文)・野村一寿(早大 県埋文)・和田晋治(明大 富士見市教委)・新谷和孝(立正大 木曾広域)・青木正洋(国大 諏訪市教委)・松原和也(富山大 木曾広域)・佐々木満(立正大 甲府市教委)があげられる。地歴部では活動を生徒会誌に発表したり、会誌『木曾谷』(32年)・『きそ路』(38・39年)に出している。今は活動が無い。



▲お玉の森遺跡で、木曾西高生と

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

## 目次

- |            |                             |          |                               |
|------------|-----------------------------|----------|-------------------------------|
| ■田舎考古学人回想誌 | 木曾西高校地歴部の活動と卒業生 神村 透 …1     | ■リレーエッセイ | マイ・フェイスレット・サイト(第118回) 竹原 学 …3 |
| ■考古学の履歴書   | 公務員としての考古学研究者(第14回) 石井則孝 …2 | ■考古学者の書棚 | 「文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷」三瓶裕司 …4 |

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第14回)

石井 則孝

## 《わが友・わが趣味 ―その3―》

## 1. 前回の大学院芸術学の続き

曾津記念室での大学院の授業は、希望すれば学部学生・聴講生の参加も可能であった。椅子は10人分位しかなかったが、年長者は元金沢芸術大学教授の服部匡延さんと、元東博副館長の奥村秀雄さん、元清泉女子大教授の五味充子さん、元多摩美術大学図書館長の邑楽 弘さん、現在も女優として活躍している白石奈緒美さん等、多士済々のメンバーだった。緊張感あふれる授業で、安藤教授は多摩川の田舎から、毎日タクシーで昼頃大学に来られ、三朝庵のザルソバ二枚が到着すると、これが授業の開始であった。腹のすいている時、目の前で大きな音でソバをすする教授をどんなにうらやましく思ったとか……。使用された文献は「東大寺要録」「七代寺日記」「七代寺巡礼私記」「東征伝」「北越雪譜」「搜神記」等々 中国美術史を念頭に置いた学部学生にとってはかなり程度の高い授業であった。4時間ぐらいの演習授業であったと思う。安藤教授は、唐招提寺 鑑真和尚の研究の第一人者であり、曾津ハ一先生の高弟でもあった。学生たちには、奈良のことにあつちを学ばせようという考えであったと思う。

広重の東海道五十三次の浮世絵研究を行った際、授業の終了と共に、実際に東海道五十三次の実地調査をすることとなり、イズズの中型自動車、運転手は邑楽 弘さんと私、大陸横断の大旅行の経験のある私がほとんどその任に当たっていた。浮世絵に描かれた風物を確かめ、食に関してもその地の名物を食べながら3泊4日の大旅行を行った。奈良日吉館へ到着した途端車は故障し、奈良在住の安藤教授の親友・小泉 清画伯の弟子小川啓司イズズ自動車部長のお世話になったことを忘れることが出来ない。

## 2. 唐招提寺 戒学院宿泊研修

唐招提寺境内全体図を作成し、伽藍の配置状況を確認するため、服部・吉村・五味・邑楽・石井の面々が、安藤先生共々戒学院に宿泊して研修実習となった。戒律の厳しい唐招提寺、三食共唐招提寺の食堂で食していたが、それが全て精進料理、3日目頃になると全身の力が抜け、野外での作業が苦痛になっていた。茶ガユと漬物の毎日、若者には到底耐えられない。酒の代わりに本直し、これがきいたこと本直しで二日酔いに、これにはまいり、日吉館へS・O・S 招提寺へは内緒で山盛りのステーキを焼いて、オバチャン自から寺へ持参してくれた。これには全員大喜び、安藤先生もしかりであった。翌日からの作業が順調に進み、初期の目的を果たし帰京したのであった。

## 3. 日本ミイラ研究グループの発足

曾津記念室の授業の中で、「北越雪譜」を読むことになり、その中で登場してくる新潟県寺泊町西生寺にある弘智法印に関心が高まり「枯骸生けるが如し」の文章から、かつて曾津先生が若いころに見たということ安藤教授が記憶していて、日本にもミイラが現存していることがわかり、唐時代のミイラの現存もわかっていることから、本格的に日本のミイラと取り組もうと考えたのであった。

新潟大学解剖学教室の山内竣英・野崎孝夫・小片 保の諸教授の応援を得て、昭和34年の夏新潟日報の後援で弘智法印の調査に手をつけたのが最初であった。昭和35年の夏には、毎日新聞社の後援で「出羽三山ミイラ学術調査団が組織され、東北大学の堀一郎教授・鶴岡市の出羽三山の研究者戸川安章

氏も加わり、庄内地方に現存する入定ミイラ5体の調査を行った。学生メンバーとして、私と甲斐大策(画家・アフガン研究者)が加わり、実行部隊として大活躍した。同年秋には、東大の駒井和愛博士や早大の荻野三七彦博士等も加わり、「日本ミイラ研究グループ」が結成された。

昭和25年に実施された中尊寺藤原四代のミイラ調査は、日本のミイラ研究史上にエポック・メイキングな事件として取り上げられたが、あれは奥州藤原氏という限られた対象の研究であつち、広く日本におけるミイラ習俗の研究の一例としての藤原氏ミイラが取り上げられたに過ぎないのである。

われわれの研究グループは、ミイラを人類学上から、民俗学・宗教学・考古学・思想史・などの上から総合的にこの問題を解決しようと日本の科学に新しい扉を開いたと自負している。毎日新聞社事業部長であつち後に昭和女子大学副学長を勤めた松本 昭教授の「日本ミイラ」を読んでいただければ幸甚である。

## 4. チトー大統領からの招待

昭和30年(1955)代前半頃は、スターリン批判がはじまり、ジュネーブ4巨頭会談が開かれ、日ソ国交が回復し、南極観測が開始され、連・アメリカの人工衛星打ち上げが成功した頃である。

日本が東欧諸国と貿易を開始した頃で、ユーゴスラヴィアのチトー大統領がバルカン半島での勝利を治め、ようやく戦争が遠のいた時代であった。

ユーゴスラヴィアとの貿易を開始した日本企業が集まって「日本・ユーゴスラヴィア協会」を設立して、その会長に同和鉱業の社長で日本ボーイスカウト連盟の会長を務めていた久留島秀三郎氏が就任していた。

前記した夕管クラブの会員の中からチトー大統領に憧れていた学生が4～5人居て、ユーゴ大使館へ出入りするようになり、ユーゴ協会の会員となった後、ユーゴの研究を立ち上げようということとなり、「日本ユーゴスラヴィア協会青年部」を結成した。この中から早大出身の田中一生さんが、ベオグラード大学への留学が許され、初めて日本からユーゴへの研究者の一号として足跡を残すことになった。

この時代、ユーゴは新しい国家としての地固めのため、国内全体が遅れていた祖国の整備と建設に力を入れていた。そこでチトー大統領は毎年夏に、世界の青年たちの力を借りて道路建設を推し進めようとして、「世界青年友好祭」をベオグラードで開催していた。

田中一生のベオグラードでの生活が始まったことをユーゴ政府も知り、昭和37年に、ユーゴスラヴィア協会青年部宛て、チトー大統領からの招待状が届いた。

青年部としてこの機会を逃してはならじと、金井恵美(国際電電に勤務)、土田

純二(広告宣伝会社南北社)と私とが中心となって渡航費用を工面すべく、ユーゴスラヴィア協会所属の各企業に、久留島会長お墨付きのユーゴ行の趣意書をもって金集めに奔走した。予定の金子

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

が集まらず、派遣者も上記した3名となり、最後には会長から12万円を借用し同年の5月に横浜港からユーゴの貨物船ヴェルビットで、土田と石井が乗船し、金井は、仕事の都合上、航空機によるユーゴ入りを果たした。

船出はしたものの、ヴェルビットは4000吨の小貨物船で、太平洋の荒波、印度洋の大波に悩まされながら、アデンから紅

海に入り、スエズ運河を抜け地中海に入り、予定より遅れること1か月、ようやく8月中旬リエカ港に上陸することが出来た。バルカン半島探検用に富士重工から提供されたスバル360とスバルサンバーも同時に下船させることが出来た。港には、田中一生・金井恵美が待っていた。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 118

#### 殿村遺跡 ～長野県松本市～

竹原 学

殿村遺跡は、松本市の北東部、旧東筑摩郡四賀村会田にある。私と遺跡の出会いには2008年、松本市教育委員会が合併後初めてこの地区で行った、学校建設に伴う発掘調査に遡る。最も当時私は他遺跡の調査を担当していた。当初は縄文・古代の集落跡と目されていた遺跡は調査開始直後から様相が一変し、校舎建設範囲を超えて台地を覆う人為的な盛土層が姿を現した。しかもその南縁には石積が伴っている。周辺からは15世紀代の陶磁器が出土し、中世の大規模な造成遺構であることは明らかだった。想定外の事態に調査期間は大幅に延長され、私も翌年から調査に加わることになった。経験したことのない中世の造成遺跡に直面し、その調査方法や解釈に大きく戸惑いつつも、調査はその年の12月まで進められた。

2年にわたる調査で明らかになったことは、造成が東西約80m・南北60mの範囲に及び、盛土が最大で3mに達していること、15世紀から16世紀にかけて拡張が4回繰り返され、その前半期において平場前面に石積が設けられたことである。石積は周辺で調達できる輝石安山岩の自然礫を加工せずに積む。古段階の石積では、最大2mに達する大型石材の最も広い面を表に向けて立てている。そのため控えは短く、せいぜい3、4段の不安定な垂直積みで高さも1m前後しかないなど、土木的効果よりも視覚的効果を意識した造りとなっている。また、近世城郭の石垣に見られる矩や反り、裏込栗石も一切ない。新段階の石積では築石が小振りになり控えの長い小口積みが



▲石積と平場遺構



▲虚空蔵山と会田の景観

意識されるが、やはり垂直積みで築石はなく、古段階の石積とともに隅角部を有さない、正面だけの構えである。

15世紀に遡る石積の検出は、信濃では例がなく全国的にも多くはない。これまで京都市銀閣寺・勝持寺、米原市能仁寺・弥高寺など近畿地方を中心にいくつかの例が知られるが、いずれも殿村の石積と同様の特徴を有し、戦国末期に城郭で採用される石垣以前の古い技法に基づくものと言えそうである。

次に平場上の遺構に目を移すと、広大な平場空間は石列（築地塀）、柵、溝で分割され、礎石建物や掘立柱建物、炉跡などの施設で全体が構成されている状況が見て取れた。出土遺物は、在地産土師質土器・古瀬戸・中国産陶磁・石製品・銭貨・鉄製品・木製品など、松本周辺の遺跡にあっては豊富で、とりわけ中国産陶磁（天目・青磁・白磁・青花）の存在と、風炉や中国産茶壺、上質な茶臼など茶道具の存在が目された。

これらの成果の中で最も注目すべき点は、大規模な労働力が投入された石積や造成、礎石建物の存在、高級陶磁器や茶道具の存在で、築造に有力な勢力が関与したことは間違いない。その勢力とは何か？私たちが当初注目したのは、中世この地域に拠点をついた土豪、会田氏である。特に殿村はその地名が示すように会田氏の居館があった地と伝わり、地元でもよく知られている。かかる造成跡が会田氏の居館跡ではないかとの期待は、私たちだけでなく遺跡に関心を寄せる地元の住民も抱くことになり、そのことが結果的に遺跡の現地保存決定という奇跡につながった。しかし、会田氏の実態はわずかな文書と伝承を除いて手掛りに乏しく、遺跡との関係も分からない。また、先の事例のように、15世紀代の石積はほとんどが寺院に伴うものであり、信濃における城館への礎石建物の導入も15世紀まで遡り得るのか疑問も残る。

従って、居館跡を積極的に肯定する根拠はなく、現状ではむしろ寺院など宗教施設の可能性を第一に考えている。かつて調査地に隣接する長安寺の旧伽藍がここにあり、会田氏と盛衰を共にしたとの寺伝もある。築造者は会田氏かあるいは会田氏と関わる宗教勢力のどちらかの可能性が高いのだろう。

こうしたことから、遺跡の性格をより明らかにするため、私たちは視野を遺跡の周辺にも拡大することにした。例えば会田盆地は鉄道開通以前まで交通の要衝であり、この地を通過する保福寺街道と北国脇往還（善光寺街道）は東山道とその支道に比定される古道だった。街道沿いの会田は最も開けた地で生産の拠点だった。近世に会田宿が整備されたこの地に会田氏が本拠を置いた理由を、交通路と生産基盤の側面から探る必要がある。もうひとつ、中世において一帯が宗教空間を形成していたことが注目される。殿村遺跡の背後には、盆地の北を画する連山の中にあつて、富士山型の独立峰として一際美しい姿を見せる虚空蔵山が聳えている。会田盆地のどこから見てもそ

れと分かる山容は、まさに地域の象徴的存在であり、その名前からも察するように真言修験やそれ以前からの山岳信仰と関わりが深い山だったのだろう。実際、山頂周辺には磐座を彷彿とする巨岩の露頭がいくつか存在する。

そして、山麓の岩井堂沢には寺社がひしめく。山の宗教性の象徴ともいえ山頂直下の洞窟に虚空蔵菩薩を祀る岩屋社にはじまり、麓の会田までの一帯には天正9年の記録に5カ寺の記載がある。その多くは元々真言密教系の寺院だったと考えられ、中世寺院が密集する宗教空間となっていた。

このように、交通の要衝、会田氏の拠点、宗教空間、この3

つの要素が会田地区の歴史的景観を形成している。これを明らかにすることが殿村遺跡の性格を解明する鍵となるに違いない。松本市教育委員会では平成22年から28年まで、保存が決定した殿村遺跡の発掘を進めるとともに、虚空蔵山一帯の歴史的景観の調査を実施することにした。

最初の調査から6年、殿村遺跡と密接に関わる虚空蔵山城の発掘調査、個人所蔵史料の調査など、事業は進展を見せつつある。その先にある遺跡の整備や歴史的景観の保全など、課題が山積する中、私と殿村遺跡の関わりも当分は続くことになるとであろう。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは宮島義和さんです。

## 考古学者の書棚

### 「文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷」

森本和男 著／彩流社(2010)

三瓶 裕司

この本は親しくさせて頂いている著者ご本人から頂いた。読んで感想を聞かせるようにとのことであったが、頂いた時は正直たじろいだ。何しろ800頁に及ぶ大作であったためである。

読み始めて「この本は『文化財』そのものではなく、『文化財が近現代においてどのように取り扱われてきたかという歴史』を詳説しているのだな」ということがわかってきて、俄然興味を持って読みこんでいったことを思い出す。

この本の構成は以下の通り5部となっており、各部には章が設定され各論は全体で18章に及ぶ。

第一部 近代社会と古美術の成立

第二部 保存に関与した社会層と国民国家

第三部 思想教化としての史跡

第四部 海外における文化財

第五部 転生する「伝統文化」

第一部では幕末から明治初頭にかけて欧米列強とのかかわりの中、軽視されていく古器旧物についてまとめられ、古器旧物が次第に伝統文化としての文化財扱いから殖産政策にかかる商品として扱われる変化が述べられている。

具体には明治維新によって、政府による神道国教化に伴う神仏分離と祭政一致、神社からの仏像・仏具の排除令の発布、そして廃仏毀釈へと動く社会が示されている。またそのような世情の中、一方では幕末以来ヨーロッパ各地で開催された万国博覧会や博物館等の視察経験から「古器旧物を保全」する政策もとられ、あわせて国家事業として博覧会を開催し文化財としてではなく、殖産産業の担い手の一つとして古器旧物が扱われるようになる。

第二部では、明治に入り全国の社寺は、近世までそれぞれの社寺領として安堵されていた土地が公地化された。また、寺社ごとに勧進を目的に行われていた富くじなどを含めた様々な経済活動が禁止されたことで一部の社寺を除き急速に衰退する。その後、政府はこれらの社寺の財源として地域社会からの寄付をあてにする政策をとる。これは折からのインフレによって進んだ農村での階層分化とそれによって生まれた豪商農らの出現時期と重なる。こうした新興の富裕層らが地元の名士として介入していくことにより、各地で社寺の保存運動が活発化する。また何よりも政府は、各国の要人が日本の代表的な社寺の見学を目的に来日する様になっていることを鑑み放置しておけない状況となる。こうした背景から「古社寺保存法」が制定され、社寺とそれらが所蔵する古器旧物が保存されるようになった。

第三部では「古社寺保存法」施行以降、大正、昭和初頭にかけて制定された「史跡名勝天然記念物保存法」を経て明治天皇聖跡保存など急速に進む史跡・旧跡の思想教化利用、果ては軍部を中心とした主導グループによる史実を無視した神代研究などにより太平洋戦争へ突入していく様子が示されていく。

第四部では、海外の国々において文化財に対してどのような関与をしてきたのかということが述べられている。日清戦争時の略奪行為を手始めに、北清事変では日本を含めた各国の軍隊が中国大陸の文化財を海外へ持ち出している。その後、ハーグ国際平和会議により略奪行為が禁止された後も太平洋戦争終結にいたるまで様々な『文化財政策』がとられたとある。

第五部では、戦後GHQ文書をもとにアメリカによる文化財の保護政策について論じられている。

連合国最高司令官の政策として文化財の保護・文化財の軍事選挙の禁止・略奪文化財の同定・収集・報告を行うとの基本姿勢がとられたのに対し、日本側からは戦争に対する賠償を文化財によって行うという議論がわき上がったことなどがエピソードとして語られる。

また、日本側が略奪した文化財の返還についても言及されており、終戦以降、現在に至るまで解決に至っていないことが課題と紹介する。

最後の章では、今や先進諸国では膨大な文化財情報がデジタル化され、インターネットを通じて世界へ発信され続けている時代である。それに対し、日本の文化財情報が欧米の文化財情報に対して広く伝わっていない現状を憂い、各国に立ち遅れることのない様にと警鐘を鳴らす。

この本によって文化財とは、明治以降たった150年間でもこのように扱われ方や社会的立ち位置がめまぐるしく変化したことを改めて知った。その時々々の政策や風潮によって人心は流され、大切にしていたものを突如打ち捨てたり、売り払ったりする。今は『国民共有の財産』として扱われている文化財も、今後政策一つで扱いが軽くなってしまふ日が来るかもしれない。略奪文化財問題などは遠い昔の物語

ではなく、現在、日本考古学協会において『あるべきところへあるものを』と提起され続けている。

我々はこうした儆くて危ういものを扱っているのだ。

## アルカ通信 No.125

発行日 2014年2月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp